

書翰文

市野 緑

山本正臣様

梅雨最中とは申し候へど、續く曇雨天には些か閉口致し居り候。

扱て、私文語教室にて千鶴子様とご一緒させて頂き居り候處、毎月山本様の「連載エッセイ」自然観察者のひとりごとを頂戴致し楽しく拜讀させ頂き居り候。

山本様の草花、蟲、鳥等小さき命に向けられし直向き純なる眼にて描かれし隨筆は、いづれもほのぼのと心暖まり誠心地よく存じ居り候。念願のマツムシ草を見られたしと自生地にも幾度も通はれ候處、漸々二十四年目に弾むお氣持ちを抑へられつつそのマツムシ草と出會はれし時の一文は、山本様のお心相傳はりて嬉しく感じ候。

又、春の七草御形は平安の書物にては母子草と記されある由。先達て店先の寄せ植に母子草を見付け、その何氣なき趣にあゝ『日本の草花』と感じ入りたる所にて御座候。

道邊にて、おしろい花、つゆ草、あかまんま、振摺(もぢずり)草等を摘みし子供の頃の事ども甦り、心和む思ひ致し候。

山本様の隨筆にてそぞろ花心誘はれ、名も知らぬ小さき草花に目の行くこの頃にて御座候。これよりも山本様の優しき観察眼お分け頂けるを樂しみに致し居り候。

(平成二十六年七月)

兄の想ひ出

遠藤 紀子

緑の美しき候となれり。まばゆき緑を目にしつつ、忘れもせぬ四年前の五月二十八日急死せる兄を思ひ「再びこの緑を見ることなし」など、思ふことしきりなり。

兄は地方小都市の小學校校長を勤めしあと、請はれて市教育長を勤めたり。義姉の言ふ「根つからの教育者」もあながち大袈裟とは思はれず。我には最大の褒め言葉に聞こえ、兄も耳にせば喜ぶこと間違ひなし。

蛇足なれど私の攜帶電話番号の下二桁は、〇〇二三(まるまるにいさん)、〇〇二三なり。覚えやすきことこの上なし。

(平成二十六年五月)

若き頃我庭に来る鳥に些かの興も覺ゆることなく過ごせり。然れども老年となれる今、朝餉を食し乍ら鳥の轉りに耳を澄ませ、枝から枝へと飛び交ふ小鳥を眺むることを愉しみの一つとなせり。庭にてしばしば目にするは、目白（めじろ）、鶉（ひよどり）、四十雀（しじゅうから）の留鳥の類ひなり。

それぞれに特性ありて面白し。

・目白

黄緑色の羽をして目の周り白し。二羽にて來りて、追ひかけ合ふ如くにして花を啄む。

・鶉

鼠色の毛に被れ一羽にて來り、櫻の花等一口にして飲み込み、蟲も食すると聞く。

雑食のやうなり。

・四十雀

體は黒色にして頬は白し。速やかなる動きをなせり。庭に留まることなし。シユピツ、シユピツテと高所より高らかに轉る。

先日のこと、午下より大雨模様とならむとの豫報あり。朝餉をとらむとする時既に細雨降り來たる。庭より頻りに鳥の轉りを聞く。窓より窺ひみるに、數多の目白集ひ、輪となりて櫻樹を圍み轉りながら花を啄むを観る、かつて觀たる事なき様に出逢ひぬ。眞に之、「大雨にならぬ今のうちに皆でお腹を満たしておきませう」と鳥語を聴きたる如きの心地す。

間もなくして豫報通りに風雨共に激しく窓打つ午下となれり。

（平成二十六年五月）

若草物語

奥村 淳子

我時空を超えたり、といはば人驚く。さりながら是、我が實感なり。

先般地元上映會にて一九四九年版「若草物語」上映す。亞米利加の南北戦争の頃の、父の留守を守る慎ましくも美しき母と四人姉妹の物語なり。憧れのエリザベス・テイラー、マーガレット・オブライエン等美少女多く出演す。そこには古き良き米國有り。再上映にまだ十代の頃胸躍らせ見し記憶よみがへる。導入部始まるや、我突然若き少女に戻り、そのまま引き込まれて終はるまで若き日の私の儘なり。あたかもこの何十年の過ぎ去りし月日無きが如し。終了してややありて、はつと現在の己に氣づきぬ。そこには歳を重ねし我有り。我ながら不思議なる氣持ちなれど、心には若きときめき残り、通常は己自覺しつつ映像の世界を楽しむも、此度は全く異なれり。

完全にタイムスリップの感覺なり。幸せにして不思議なる感覺鮮やかなり。これ人間のみの能力ならむ。平素雑念に亂るる我が頭腦なれど、一瞬の時空超えし感覺あり。この體驗嬉し。
(平成二十六年四月)

大森貝塚

武下 範子

四月六日、未だ櫻の散り残れる大森貝塚に赴く。

戦後疎開先より歸京せし折、接收せられし我が家に戻ることに適はず、暫く大森に住みしことありしが、近くの貝塚に足を向けし事なかりき。

モースの大森貝塚發見に多くの偶然の重なりたりといふ。明治十年満足なる基礎教育を受けざるも新設せられし東京帝大のお雇外國人となり來日。その翌々日横濱より東京に向ひし折、大森驛を出でし所に露出せし積み重なりたる貝殻を發見すといふ。モースの來日目的は日本沿海の腕足類の研究にあり。彼何故に海側ならず山側に座したるか。假に海側に座したれば貝塚發見はなさざれしならむ。モースは豫定通り二か月後歸國せる事となりしかと思ふ。大森貝塚の發掘・發見、日本考古學、縄文時代の研究に大いに寄與せしが、残念乍ら戦災にて記録は消失せりといふ。

現在品川区遺跡庭園に「大森貝塚」、少し離れし所、大田區に「大森貝塚」の石碑あり。

(平成二十六年五月)

友

梅津 睦郎

先に「人間として吾を導きしは母京なり」と記せり。これに一筆添へたし。

吾昭和二十五年(一九五〇年)岩手花巻より初上京し、大學に入る事となれり。生活は奨學金と小額の仕送りにて大事無しと思へど、終戦五年にて甚だしき食糧難の上、又言葉は通ぜず。學問・生活の兩面にて自信なかりき。爲せば爲るかと思ひし時、母は一言「お前に勉強致せと云ひし事なし。良き友の得らるる事を望む」と。參つたり。

四年間遊學、友と夜を徹して安酒を飲み、語り、胃荒れたり。又東京の女性の垢抜けたる姿に憧れ、失戀二度。「五反田ホーム木曜六時來る迄待つ」の電報を打ち、八ヶ月待つも來らず。池田山に向ひて登る都電の尾燈に二條のレール瞬間閃き、その上を見上ぐれば北極星あり。はたと吾を見つめ北へ歸れと告ぐるが如し。省みて數人の友に恵まれしは遊學の成果なりと云ふべし。

昭和二十九年二月五日、卒業試験の最中、突然下宿にて大量吐血せり。母、七人の子を残し

上京、嚴寒の二ヶ月小さき火鉢のみにて吾を看病せり。試験欠缺席六科目ありて卒業適かなはず。その折先輩の米津昭子氏よねつてらこ(後、慶應大學法學部教授)來訪、吾に代りて六科目(經濟學)につき論文を書く。母そを攜へ就職先未定なりし友の案内にて、吹雪の中教授宅(八王子、埼玉等)を訪ね懇願せり。東京を去るに際して母曰く、「汝眞に良き先輩、友人を得たり。誠喜ばしく思ふ。汝の如何程生くべきかは知らねども、友に報ゆる人生を歩め」と。今八十二歳、七つの大病を患ひしも(血液癌、C型肝炎の癌界、脳幹梗塞等)、高校、大學、病院、會社、社會夫々に大いなる、温かき友情なくして今の吾無し。而うしてこの人生、友情に報いしかと問はるれば甚だ忸怩ちくちたるものあり。「戴き」の儘人生を終へんとするや、今更ながら無念なる事限りなし。

(平成二十六年二月)

根尾谷淡墨櫻ねをだにうすずみ(岐阜縣本巢市)を訪ねて

水澤 雄也

四月七日より十日まで厚木市在住の弟(七十歳)と「R」の青春十八切符による三泊四日の旅を樂しみたり。

目的地を三重縣(四月八日)、岐阜縣(四月九日)、愛知縣(四月十日)の三縣に定めたり。このうち「淡墨櫻」の印象は格別なり。以下にこれを記す。

四月九日水曜日午前八時ホテルルートイン大垣を出發、午前中大垣市より十五キロの近距離に位置せる關ヶ原の古戰場を訪ねたり。JR關ヶ原驛より徒歩二十分にして古戰場到着。「史蹟關ヶ原古戰場決戦地」の記念碑あり。散策せること三十分、見學人は我が兄弟二人のみ。大垣市に戻り、正午過ぎ大垣・樽見間運行の樽見鐵道にて終著の樽見驛に向ふ。同驛は大垣より三十五キロを北上せる地點にありて、乗車約一時間なり。驛より徒歩二十分にて目的地「淡墨櫻」に午後二時著。

満開なり。所在地は本巢市根尾なり(平成二十六年二月までは岐阜縣本巢郡根尾村と稱したる由)。なほ、同地は福井縣境まで約二十キロの近距離にあり。

この櫻は彼岸櫻の一種にしてエドヒガンといふ。高さ十六米、幹回り十米、第二十六代繼體天皇お手植と傳へられ樹齡約千五百年。咲きはじめは白色の花びらの次第にうす墨色に變はることにより「淡墨櫻」の名のつきたる由。國の天然記念物に指定せられ、福島縣の「三春瀧櫻」、山梨縣の「山高神代櫻」とともに日本三大櫻の一と稱せらる。

當日は地元にて新聞の一面に満開の由報せられ、かつ、好天もあり、大變なる賑ひを見せたり。見物せること一時間。

満開の日に訪ぬることの適ひし幸運を喜び、午後六時ホテルへ歸著せり。

(平成二十六年五月)

三月、大阪にて開かれたる大相撲において鶴龍優勝し横綱昇進を決めたり。この結果、横綱は三人となり、全員モンゴル出身者となれり。彼の地より日本に來て、嚴しき修業に耐へ、最高位を射止めたるは、立派といふほかなし。而して彼等の日本語は、昨今の若者の意味不明の言語に比ぶれば、正統派と評するに値す。嚴しき稽古の傍ら並々ならぬ努力を重ねし賜と評すべし。日本の國技といふ點よりは問題あるも、かくなる上は、年三回の地方場所の一回をウランバートルにて催すも一興なりと覺ゆ。いかなりや。

(平成二十六年四月)